

村にいたのはどんな馬？～文書に見る 110 年前の馬たち～

飯能市立博物館 学芸員 金澤 花陽乃

かつてトラックや自動車が無かった時代、馬が輸送等に大きな役割を果たしていたことはよく知られているところです。しかし、その馬について具体的な姿を考えたことはあまり無いのではないのでしょうか？今回は文書の記録から、当時の馬の姿に迫ってみたいと思います。

当館が所蔵する旧加治村役場文書の中に、明治時代末から大正時代初めにかけての馬匹関係書類が残っています。このうち、大正元（1912）年の馬匹検査出場馬連名簿（以下「連名簿」）には、検査に出場した馬のデータが記録されています。馬匹検査とは、軍が軍馬として使えるような馬を徴発するために行った調査のことです。対象となる馬は五歳以上かつ四尺（120 cm）以上（※1）という規定があったため、必ずしも村内にいた馬を網羅してはみませんが、当時の馬のおおよその傾向は知ることができます。

各馬体について「連名簿」からまとめたのが表①です。これによると、大正元年時点で加治村にいた検査対象馬は 17 頭、種類は雑種 1 頭を除き和種でした。その用途は、事前に記入する村側の記述では全て挽馬（ばんば／荷車などを曳く馬）となっていたのですが、検査後の朱書きを見ると乗馬や駄馬（荷物を運ぶ馬）に分類された個体もいたようです。

体尺（体高）は平均値 4.74 尺（143.6 cm）、中央値 4.69 尺（142.1 cm）となっており、現在よく目にするサラブレッドの平均値（160～170 cm）と比べると、かなり小さいことがわかります。また、色は栗毛、青毛、鹿毛（かげ）で、芦毛や白毛といったいわゆる白馬はいませんでした。

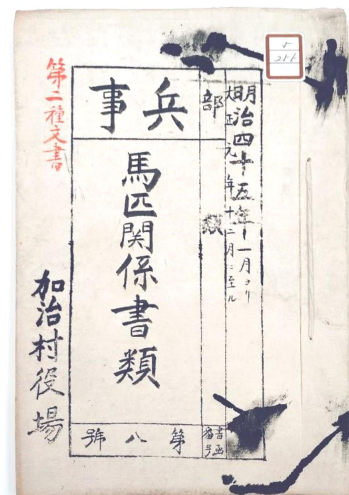
加治村で馬を手に入れる主な手段は、仲介業者を通しての購入でした。産地を見ると、青森県、岩手県、福島県、が主なようです。1 頭のみわざわざ青森県ではなく「三本木」とあるのは、同地が国内有数の馬産地であったため特筆したのでしょう。

さて、種類で述べた和種とは、日本人が古来より生活をともにしてきた日本在来馬のことです。しかし明治時代以降、日本の馬全体を軍馬資源とすることを目的とした政策の中で、和種の小柄な体格は軍馬に適さないとして外来種との交雑による馬匹改良が進められました。その結果、純粋な和種は急激に数を減らし、昭和 10（1935）年頃にはその割合は 5%以下となってしまいます。

現在日本には和種として 8 種が存在していますが、その数は全飼養頭数のわずか 2%ほどです。そして、加治村の馬たちのふる

名称	性別	用役 (村記述)	用役 (検査後)	年齢	体尺	毛色	産地	種類
朝勇	牡	挽馬	挽馬	13	4.84	栗	青森県	和種
小嵐	牡	挽馬	挽馬	12	4.84	青	福島県	和種
高千穂	牡	挽馬	挽馬	11	5.03	鹿	福島県	雑種
花勇	牡	挽馬	駄馬	12	4.42	鹿	不詳	和種
小勇	牡	挽馬	挽馬	13	4.68	鹿	青森県	和種
黒五郎	牡	挽馬	挽馬	12	4.56	青	岩手県	和種
春駒	牡	挽馬	乗馬	8	4.96	鹿	青森県	和種
鶴亀	牡	挽馬	駄馬	10	4.66	栗	岩手県	和種
大関	牡	挽馬	挽馬	7	4.92	青	奥州	和種
駒勇	牡	挽馬	挽馬	9	4.91	青	不詳	和種
北澤	牡	挽馬	挽馬	12	4.67	栗	不詳	和種
秋里	牡	挽馬	挽馬	11	4.69	鹿	三本木	和種
鈴鹿毛	牡	挽馬	乗馬	9	4.64	鹿	青森県	和種
森影	牡	挽馬	挽馬	14	4.51	青	不詳	和種
清水	牡	挽馬	乗馬	5	4.83	青	青森県	和種

表①加治村役場文書No.169「馬匹関係書類（出場馬連名簿）」より作成



加治村役場馬匹関係書類(No.169)

さとである東北地方では、今日 1 頭もその姿を見ることはできません（※2）。

【注】

※1 検査対象となる体格は年度により違った。ここでは明治 45（1912）年の通知による。

※2 純血種の絶滅を指す。混血としては寒立馬などが存在する。

【参考文献】

武市銀治郎『富国強馬』講談社選書メチエ、1999 年
大瀧真俊『軍馬と農民』京都大学学術出版会、2013 年